

日本語を第一言語とする英語学習者の 比較的自発的な発話におけるフィラーに見られるいくつかの特徴

横森 大輔¹ 遠藤 智子² 河村 まゆみ³ 鈴木 正紀⁴ 原田 康也⁵

¹ 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町

² 筑波大学人文社会系 〒305-8577 茨城県つくば市天王台1丁目1-1

³ 言語アノテータ

⁴ Pearson Knowledge Technologies 4040 Campbell Ave., Suite 200 Menlo Park, CA 94025

⁵ 早稲田大学法学大学院 〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-16

E-mail: ¹ yokomori.d@gmail.com, ² endotomoko@gmail.com, ³ kawamuras@pat.hi-ho.ne.jp,

⁴ masanori.suzuki@pearson.com, ⁵ harada@waseda.jp

概要 英語学習者のスピーキング能力を評価する上で、一つの鍵となるのがフィラーをはじめとする非流暢性現象である。本研究では、日本人学習者の英語発話におけるフィラーの特徴を把握するため、どのような形態のフィラーがより高頻度で用いられているか、文中のどの位置で用いられる傾向があるか、そのような傾向が英語母語話者とどう異なるか、という点についてこれまで収集したデータの一部を分析した結果を報告する。

Fillers in relatively spontaneous utterances by Japanese EFL Learners

Daisuke YOKOMORI¹ Tomoko ENDO² Mayumi KAWAMURA³ Masanori SUZUKI⁴
and Yasunari HARADA⁵

¹ Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University Furo, Chikusa, Nagoya 464-8601

² Faculty of Humanities and Social Sciences, Tsukuba University 1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki,
305-8571

³ Language Annotator

⁴ Pearson Knowledge Technologies 4040 Campbell Ave., Suite 200 Menlo Park, CA 94025

⁵ Faculty of Law, Waseda University 1-6-1 Nishi-Waseda, Shinjuku-ku, Tokyo, 169-8050

E-mail: ¹ yokomori.d@gmail.com, ² endotomoko@gmail.com, ³ kawamuras@pat.hi-ho.ne.jp,

⁴ masanori.suzuki@pearson.com, ⁵ harada@waseda.jp

Abstract This study investigates how learners of English use fillers during their response to questions. Spoken responses from 8 Japanese EFL freshman students were collected and analyzed in both a quantitative and qualitative manner. The result suggests that, although the ways in which fillers are used by learners are different from fillers in L1 English speech and those in L1 Japanese speech, they are employed by learners in some systematic ways reflecting learners' discourse strategies.

1. はじめに

英語学習者のスピーキング能力を評価する上で、一つの鍵となるのがフィラーをはじめとする非流暢性現象である。本研究では、日本人学習者の英語

発話におけるフィラーの特徴を把握するため、どのアイテムがより高頻度で用いられているか、文中のどの位置で用いられる傾向があるか、そのような傾向が英語母語話者とどう異なるか、という点についてこれまで収集したデータの一部を分析した結果

横森大輔, 遠藤智子, 河村まゆみ, 鈴木正紀, 原田康也,
"日本語を第一言語とする英語学習者の比較的自発的な発話におけるフィラーに見られるいくつかの特徴,"
日本英語教育学会第43回年次研究集会論文集, pp. 89-96, 日本英語教育学会編集委員会編集,
早稲田大学情報教育研究所発行, 2014年3月31日.

を報告し、そのような傾向が日本語の談話的特徴から影響を受けている可能性を論ずる。まず、本節においてその背景について述べる。

1.1. L2スピーキングにおける習熟度と流暢性

英語を学ぶ学習者の多くにとって、学習のゴールの一つとして設定されるのが「流暢な (fluent) 話し手になること」である。Lennon (1990) によれば、外国語学習における流暢さ (fluency) とは、広義にはその言語における (スピーキングの) 能力全般 (overall (speaking) proficiency) を、狭義には、円滑かつ容易に言葉が口から出せること (smoothness and ease of oral linguistic delivery) を、それぞれ意味する。

後者の意味でのスピーキングの流暢性を評価する方法としては、話速 (speech rate) や発話潜時 (latency) といった指標を用いるやり方がある一方で、個々の言語行動の質的特徴として、発話におけるポーズ・繰り返し・修復・母音延伸・フィラーといった現象に着目する観点も存在する (Koizumi, 2005)。これらのポーズ・繰り返し・修復・母音延伸・フィラーといった諸現象は発話から (狭義の) 流暢性を損なう源としてみなされ、「非流暢性現象 (dysfluency phenomena)」と呼ばれている (cf. Biber et al., 1999:1053)。これら諸現象のいずれも、英語学習者の流暢性について検討する上で鍵になるものである (Watanabe & Rose, 2012)。

例えば、以下は、我々が収集した学習者発話の一つである¹。

“I thi:nk that I spent お:, (0.4) お, one year:, お, one- one hour あ (0.7) during う:, (1.0) during う this semester あ. (0.3) tch! .hh う::ん? (4.5) I thi:nk, う::ん, there is many good things: .hh (0.5) about ATR CALL.”

この発話に見られるように、学習者の発話にはポーズ・繰り返し (“one- one hour あ”)・修復 (“one year:”

¹ ここでは、発話の諸特徴をできるだけ詳細に表現するため、いくつかの特殊記号が用いられている。ここで用いられている記法については以下の通り。(0.4) などの数値は、ポーズの継続長 (秒) を表している。日本語の表記は、語末に母音が挿入されているケースや日本語による音声が起きている箇所を示している。thi:nk などに見られるコロンの (:) は音の引き伸ばしを表している。ダッシュ (-) は言いかけられた音が中断された箇所を示している。hh のようにピリオドと h が並んでいるのは、吸気音を示している。tch! とあるのは、舌や唇の鳴る音を示している。

お, one- one hour あ”)・母音延伸 (“spent お:”)・フィラー (“う::ん”) といった非流暢性現象が頻繁に観察される。この中で、本研究では、特にフィラーに焦点をあて、学習者発話におけるいわゆる非流暢性の理解を深めるための手がかりを得たい。

1.2. フィラーからみた L2スピーキング

フィラーという概念でとらえられる範囲は、研究者によって、あるいは研究文脈によって多様である。本研究ではさしあたり、「発話の隙間を埋めるのに用いられる音声要素で、それ自体は発話の意味内容・メッセージ内容に関わらないもの」と定義しておこう。フィラーの典型としては、英語における “uh” や “um”、あるいは日本語における 「あの一」「えーっと」といったアイテムの使用が考えられる。一般に、発話が書き言葉に編集されるとき (例: 新聞記事、TV の字幕)、フィラーは省略される傾向がある²。

例えば英語では、“uh” や “uhm” のような原初的な音声から、“you know” や “like” のようないわゆる談話標識、そして “whatchamacallit” のような一つの節 (“what you may call it”) が全体としてフィラー化しているものまで、多岐に渡るものがフィラーとして取り上げられている (Fox, 2010)。このように、フィラーというカテゴリーは、形態統語的あるいは意味論的には極めて多様であり、上記のように談話機能の点から規定されるものとして捉えるのが妥当だろう。

フィラーの使用については、これまで心理言語学やコーパス言語学の分野を中心に、英語 (Maclay & Osgood, 1959; Biber et al., 1999; Clark & Fox-Tree, 2002) や日本語 (山根, 2003; 中島, 2009; Watanabe, 2009) といった各言語に関して多くの知見が蓄積されてきている。

第 2 言語習得 (SLA) の研究領域では、非母語話者によるスピーキングの特徴の一つとしてフィラーの用いられ方への注目が集められている (Griffiths, 1991; Kormos, 1999; Watanabe & Rose, 2012)。一般に、外国語スピーキングの学習・教育はできるだけ言い淀まずに話せるようになることを目標としており、フィラーなどの「非流暢性現象」は、学習者の習熟度の低さと結び付けられて理解されることが多い (Lennon, 1990; Foster, 2012)。これは、学習対象の言語における語彙や構

² インタビューや会議などの録音資料の文字起こしの業者などでは、フィラーの類は「ケバ」と呼ばれ、同じ録音資料に対する作業でも「ケバ取り」や「ケバ付きの文字起こし」といった形で発注のタイプが区別されている。

文の知識が不十分であることによって、オンラインでの発話産出に伴う認知的負荷が極めて高くなり、その結果として発話が途切れ途切れになりやすいという捉え方によるものである。

それに対して、フィルターと習熟度の関係性に疑問を投げかけたり、むしろフィルターの使用が習熟度の高さを示すものとして位置づける議論も存在する。例えば Kang (2010) は、米国内の大学でティーチングアシスタントを務める留学生 11 名（母語の内訳は、中国語（北京官話）が 3 名、日本語とアラビア語がそれぞれ 2 名、韓国語・ロシア語・ヒンディー語・ネパール語がそれぞれ 1 名）による発話データを対象に、発話にみられる様々な音声的特徴が「内容のわかりやすさ (comprehensibility)」および「発音のなまり度 (accentedness)」に関する母語話者からの印象評定に与える影響を調査する中で、「フィルターの回数」はどちらにも有意な影響を与えておらず、「フィルターの平均長」は「わかりやすさ」にわずかな影響がみられるのみであることを報告している。また、Temple (1992) は、フランス語の母語話者と学習者の発話を比較し、母語話者の方が「言葉に詰まった際に、ただ沈黙するのでは無くフィルターで隙間を埋める」行動をよく取る傾向がある（すなわち、学習者はフィルターを使わずにただ沈黙してしまう傾向がある）と論じている。Rieger (2003) は、英語を母語とするドイツ語学習者 10 名の発話を分析し、習熟度の高い学習者ほどフィルターを頻繁に使用することを示している。Rose (2008) は、フィルターの使用をコミュニケーション能力 (communicative competence) の一部として位置づけ、英語学習者に対してフィルターを指導することの積極的意義を説いている。

ところで、既に述べたようにフィルターをはじめとする非流暢性現象は、学習者に特有のものではない。Biber et al. (1999:1048) は、フィルター等の非流暢性現象が生起しても特に言語産出への問題として知覚されないようなものを平常的非流暢性 (normal dysfluency) と呼んでいる。したがって、単にフィルターが起きているかどうか、あるいは、どれだけの量のフィルターが起きているか、といった観点だけでは、学習者のスピーキングにおける流暢性の実態を理解する上で十分とは言えず、適切なアイテムを適切な位置で使えるか、という課題として捉え直す観点も求められる。

本研究では、日本人学習者の英語発話におけるフィルターの特徴を把握するため、どのアイテムがより高頻度で用いられているか、文中のどの位置で用いられる傾向があるか、そのような傾向が英語母語話

者とどう異なるか、という点についてこれまで収集したデータの一部を分析した結果を報告する。また、最後にそのような傾向が生じた原因について考察を行う。

2. データと方法

2.1. データの概要

本研究では、日本国内の大学の 1 年生で、同じ必修英語授業を受講している 8 人の英語発話データを対象に分析を行った。この 8 人のそれぞれに関して、データ収録の環境に一定の多様性をもたせるため、2 つの異なる状況における英語発話が収録された。

1 つは、「応答練習」と呼ばれる英語授業内のグループワークにおいて、読み上げられた質問に対してその場で応答した発話である。もう 1 つは、電話を利用したスピーキングテストである Versant English Test (Pearson, 2007) の中の“Open Questions”セクションにおいて、テストシステムから読み上げられた質問に対してその場で応答した発話である。いずれの状況においても、発話者の個人的な経験や意見を一定の長さの英文で応答することが求められている。また、いずれの状況についても、同じ時期（2008 年 1 月中旬）に収録が行われた³。

データの母体となった受講生の英語習熟度としては、ヨーロッパ共通参照枠 (CEFR) で A1 から B1 に分布している。サンプルとして選んだ 8 人は、できるだけ習熟度に偏りの無いように作為抽出を行って選ばれた。Versant English Test において、総合点がクラス平均 37.4 点に対してサンプル 8 名は平均 37.2 点であり、また流暢さの項目ではクラス平均 33.8 点に対してサンプル 8 名の平均は 34.4 点であった。

2.2. コーディング

選出したサンプルに対して、言語分析ソフト ELAN (<http://tla.mpi.nl/tools/tla-tools/elan/>) を利用して詳細な書き起こしを行った。ELAN を利用することで、ポーズ区間や発話区間の長さを 0.1 秒単位の精度で計測することが可能になっている。書き起こしは、まず第三著者（河村）が行ったものに

³ なお、これらは本研究の第五著者（原田）を中心として展開している、大規模な学習者発話データ収集プロジェクト (Harada et al., 2008) の一部を構成するものである。このプロジェクトでは 2006 年以来、毎セメスターでテラバイト単位のデータを収集し、その一部が書き起こされている。

対して、第一著者（横森）および第二著者（遠藤）が分担してチェックおよび詳細化を行った。

「応答練習」データに関しては、8人の話者につきそれぞれ2つの応答（1応答の時間は約45秒間）を分析したところ、151のフィラーを得た。

「Versant」データに関しては、8人の話者につきそれぞれ3つの応答（1応答の時間は20秒間）を分析したところ、68のフィラーを得た。

これらの合計219事例のフィラーについて、その形態的特徴および生起位置の特徴についてコーディングを行った。

まず、形態的特徴に基づいて、次のように分類した。

- (a) 母音型（例：英語の“uh”や“um”、日本語の「あー」や「うーん」など）
- (b) 英語語句型（例：“I mean”など）
- (c) 日本語語句型（例：「あの一」など）
- (d) その他

このうち母音型については、(i) 継続時間（秒）と(ii) フィラー末尾における鼻音（/n/ ないし /m/）の有無をコードした。また、発話の流れの中でのフィラーの生起様態として (iii) 独立型か前接型かをコードした。独立型とは、フィラーが前後をポーズで囲まれており、前後の発話から相対的に独立しているものである。前接型とは、フィラーの直後にポーズを挟まずに発話が行われているものである。それぞれの例を以下に記す。

- ・「独立型」の例：
“I enjoyed ... **uh** ... **this class...**”
- ・「前接型」の例：
“I enjoyed ... **uh this class...**”

なお、母音型フィラーに関しては、その母音の音声学的特徴の違いから、＜母音の種類＞や＜英語的な母音か日本語的な母音か＞といった区別をコードすることも試みられたが、判定に一貫性を持たせることや中間的な事例の扱いが容易ではなかったため、当座の分析からは射程外とした。

次に、各フィラーに対して、その生起位置の特徴として「リペア前」「文／節の境界」「文／節の内部」という3つの値を付与した。それぞれの例を以下に記す。

- ・「リペア前」の例：

“I can't ... **uh** ... I didn't read one hundred pages”

- ・「文／節の境界」の例：
“... **uh** ... I read one hundred pages”
- ・「文／節の内部」の例：
“I read ... **uh** ... one hundred pages”

「リペア前」とは、自分が言った語句の言い換えなどのリペア（修復）（Schegloff et al., 1977）の直前の位置である。「文／節の境界」には、応答を構成する文と文の間や、接続詞と後続する節の境界などが含まれている。そして、「文／節の内部」には、他動詞と目的語の間や前置詞と名詞句の間などが含まれる。

3. 結果と考察

3.1. フィラーの形態的特徴の傾向

フィラーの形態的特徴に関しては、219のうち190と、母音型が圧倒的多数を占めていた。これに対して、英語語句型は、僅か3例（“I mean”, “oh”, “yeah”）が観察されたのみであった。

これは、英語母語話者による英語発話におけるフィラーに関して、母音型フィラー（“uh”, “um”）と同程度“I mean” “you know” “well”などの語句型フィラーが用いられている（Biber et al. 1999）という分布と大いに異なるものである。

表1 フィラータイプごとの頻度

母音型	190 (86.8%)
英語語句型	3 (1.3%)
日本語語句型	23 (10.5%)
その他	3 (1.3%)
合計	219

表2 L1英語におけるフィラーの分布
(Biber et al., 1999: 1096)

	米語会話	英語会話
<i>well</i>	ca. 6000	ca. 5500
<i>you know</i>	ca. 4500	ca. 2000
<i>I mean</i>	ca. 2000	ca. 1500
<i>uh/er</i>	ca. 6500	ca. 4000
<i>um/erm</i>	ca. 3000	ca. 3000

(100万語あたりの生起)

また、日本語語句型は、23例が観察されたが、そのうちの約半数である12例が「なんだろう」およびそのバリエーション（「なんだっけ」等）であ

った⁴。

表 3 日本語語句型フィラーの内訳

「なんだろう」とそのバリエーション	12
「うん」とそのバリエーション	4
「わかんない」	2
えっと	2
指示詞型フィラー（「あの」）	1
その他（語句の断片）	2

これは、日本語母語話者による日本語発話におけるフィラーに関して、指示詞由来のフィラー（「あの」「その」）や、その他の語彙的フィラー（「えっと」「なんか」「まあ」）の頻度が高いという分布と大いに異なるものである。

表 4 L1 日本語におけるフィラーの分布

（中島, 2009: 7）

フィラータイプ	生起数 (6000 発話中)
指示詞型	617 (37.9%)
母音型	330 (20.2%)
「で」型	151 (9.3%)
「まあ」	122 (7.5%)
「なんか」	116 (7.2%)
「えっと」	83 (5.0%)
「うん」型	44 (2.6%)

以上の事実から、学習者にとって“*I mean*”のような英語語句型フィラーが利用可能ではないこと、それと同時にできる限り日本語の使用を差し控えようとする規範意識が存在することが示唆される。

3.2. 母音型フィラーの分布パターン

学習者が用いるフィラーについて、その形態的特徴と生起位置にどのような相関関係が見出せるだろうか。ここでは、特に頻度の高い母音型フィラーの内訳として、形式と位置の相関について検討し、学習者のストラテジーについて考察する。

まず、母音型フィラーのうち、「リペア前」の継続時間の平均値は、それ以外の場合よりも約半分の長さであった。

⁴ ここで日本語語句型フィラーとして認定した事例の一部は、日本語へのコードスイッチングが起きていると捉えるならば、フィラーとみなすことが適切ではない可能性もある。本研究では、「当該の文脈においてしかるべき語句の類を産出せず、別の音声でその隙間を埋めている」という点でひとまずフィラーの事例として分析を行ったが、この点には検討の余地があるだろう。

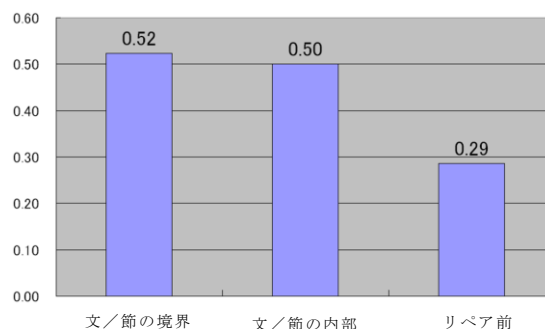


図 1 生起位置ごとのフィラー継続時間

これは、「リペア前」のように急いで語句を訂正しなければならない時と、「文/節の境界」や「文/節の内部」のように発話内容を考えるのに時間をかけなければならない時で、求められているタスクに応じて学習者がフィラーの長さを調整していることを示唆するものである。

また、母音型フィラーの末尾が鼻音で終わるかどうかという点については、「文/節の境界」においては鼻音で終わる場合が多かったのに対し、「文/節の内部」および「リペア前」においては鼻音で終わる場合が少なかった。

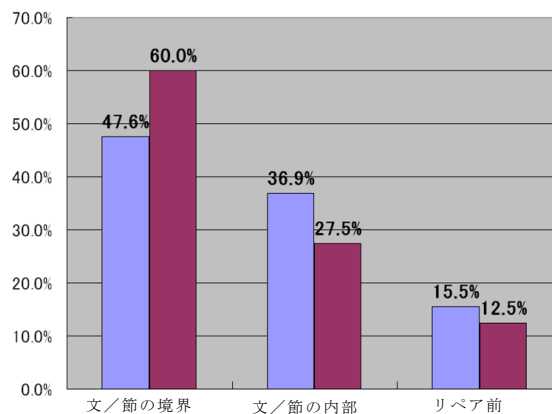


図 2 生起位置ごとの末尾での鼻音の有無
（いずれも左側が鼻音なし、右側が鼻音あり）

これは、より大きな切れ目においては、鼻音で終わるフィラー（例：「うん」）によって、その隙間を埋めようとする傾向があることを示唆している。

そして、直後の発話との関係性の観点から、独立型フィラーと前接型フィラーを比較すると、前者の方が後者よりも継続時間が長いことが示された。

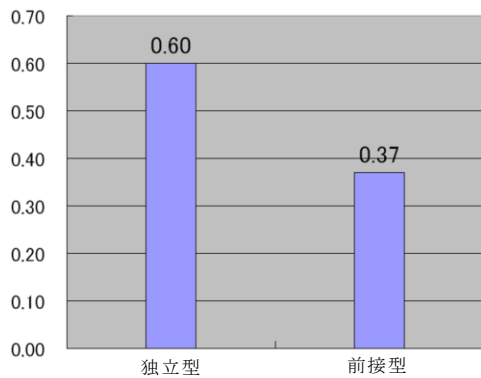


図3 独立型／前接型の継続時間

さらに、独立型フィラーと前接型フィラーを生起位置による出現頻度を比較してみると、前者は後者よりも、統語的に大きな境界に生起しやすいことがわかる。

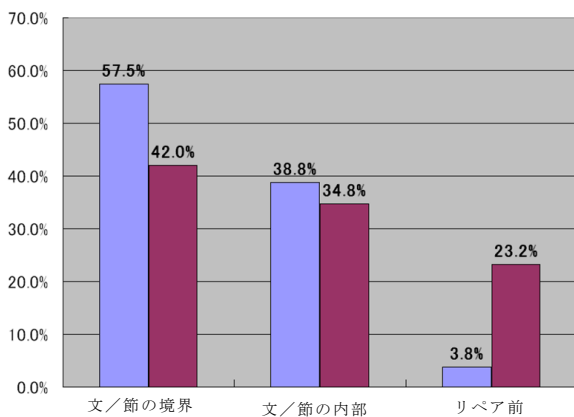


図4 生起位置ごとの独立型 vs 前接型
(いずれも左側が独立型、右側が前接型)

3.3. 議論：位置と形態の相関をめぐって

ここまでに検討してきた「文／節の境界」「文／節の内部」「リペア前」というフィラーの生起位置の違いは、それぞれにおいて話し手が直面している“課題”の違いに対応しているものと考えられる (cf. Schegloff et al., 1977)。

質問に応答している話し手にとって、「文／節の境界」、すなわち、一つの文や節を産出してから次の文や節を産出する間の位置は、ひとまとまりのアイデアの伝達を終えて次に何を言うかを考えなくてはならないという課題に話し手が直面している局面である。このような位置において、持続時間が長く、末尾を鼻音で終結させ、また、前後にポーズを伴ってフィラーを産出することは、自分が発話そのものの進行を中断し、次に言う内容を検討して

いるということを、聞き手にディスプレイするストラテジーとしての意味を持つと言える。

また、「リペア前」、すなわち、発話の途中で自覚した問題に対して修正（リペア）を施す直前の位置は、その文や節の全体構造を保ちながら、問題の要素を修復してから元の発話産出の軌道に復帰しなければならないという課題に話し手が直面している局面である。このような位置において、短く、鼻音では終わらないようなフィラーを、直後の要素と連続して産出することは、話し手が「今この瞬間に」問題に気づき、問題の修復と発話の起動への復帰をできるだけ急いで行おうとしているということを聞き手にディスプレイするストラテジーとしての意味を持つと言える。

そして、「文／節の内部」、すなわち、一つの文や節の産出を開始してから終結させるまでの途中の位置というものは、あるアイデアの伝達を開始しているものの、特定の表現の産出に困難があるなどの理由で発話が途中で止まってしまっている瞬間である。このような位置において話し手が直面している“課題”は、「文／節の境界」の場合と「リペア前」の場合のちょうど中間的な性格になるだろう。すなわち、産出途中の発話について自分が検討していることを示しつつ、その文や節の全体構造は見失わせないようにしなければならない。このような位置において生起するフィラーが、「文／節の境界」の場合と「リペア前」の場合のちょうど中間的な性格を有しているということは、話し手のストラテジーとして考えれば理にかなったものであると考えられる。

4. まとめと考察

本分析から得られた知見および考察は次の通りである。まず、今回のサンプルとなった学生のフィラーには、英語語句型や日本語語句型はほとんど含まれず、母音型が圧倒的である。このうち、英語語句型フィラーの頻度の低さについては、学習者にとってフィラーとして利用できる英語表現が知識として定着していない（あるいは知識として知っていても運用において自動化に至っていない）ものと考えられる。また、日本語語句型の頻度の低さについては、学習者たちが授業課題という文脈における「可能な限り英語で話すべきである」という規範に志向し、そのような規範を再強化している営みとして理解することができ、英語学習活動という観点からは肯定的に評価することができるだろう。

英語語句型や日本語語句型のフィラーと比べ、母音型のフィラーは、Levelt (1989:483) も示唆して

いるように、言語中立的な音声としての性質を有している。したがって、「可能な限り英語で話すべき」という規範と「沈黙は避けられるべき」という規範が存在する時に、英語の発話がスムーズに行われないう場合の次善の策として頻出するのは理にかなっていると言える。

以上の点において、学習者によるフィラーの使い方は、彼らの目標の一つとして考えられる英語母語話者によるフィラーの使い方とも、彼らが母語である日本語で話す際のフィラーの使い方とも異なる、一種の学習者言語としての特徴を帯びていると言えるだろう。

次に、同じ母音型であっても、その継続時間の長さや末尾が鼻音で終わるかどうかといった微細な形態的特徴によって、生起する文中の位置の傾向の違いがあることが示唆された。すなわち、「文／節の境界」では前後の語句からの自律性の高いフィラーが用いられる傾向があり、「リペア前」では前後の語句からの自律性が低いフィラーが用いられる傾向がある。そして、「文／節の内部」では、両者の中間的な特徴を持ったフィラーが用いられている。これは、それぞれの文中の位置において話者が直面する課題の違いが反映した結果として捉えられる。この点は、学習者たちが必ずしも英語の習熟度が高くなくとも、フィラーをシステムティックに使い分けていることが示唆される。

データ分析の結果、英語学習者によるフィラーの使用は、英語母語話者のそれとも日本語のそれとも異なる、固有のパターンを示していることがわかった。それと同時に、限られた言語知識の中で、文脈上適切なフィラーの使用が志向されているという知見を得ることもできた。

5. 今後の課題

今後は、データ分析におけるコーディングの粒度をより高める必要があるように思われる。第一に、既に述べたように、母音型フィラーに関しては、その母音の音声学的特徴の違いから、母音の種類や英語的な母音か日本語的な母音かといった区別をコードすることも試みられたが、判定に一貫性を持たせることや中間的な事例の扱いが容易ではなかったため、当座の分析の対象とはしなかった。そのため、学習者が「英語的なフィラー」をどの程度用いており、また「日本語的なフィラー」をどの程度用いているか、といった点を考察する上では本研究には限界がある。今後は、判定の一貫性や中間的事例の扱いを検討の上、この区別を分析に含めることが望まれる。

第二に、本稿でリペアと呼んだものには、文の「再開始」(“restart”)と呼ぶべきタイプ(e.g., *I can't ... um, I can't read...*)と、「語句の置き換え」(“replacement”)と呼ぶべきタイプ(e.g., *I can't ... um, I don't read...*)が含まれており、これらは話し手が直面する課題という点で性質が異なっている可能性がある(Schegloff, 2013)。

第三に、本稿で「文／節の境界」としてコードした文中の位置の中でも、文と文の間の位置(例:[Sentence] ... *uh...* [Sentence])と、接続詞とそれに導かれる文の間の位置(例:*But, ... uh...* [Sentence])では、フィラーによって行うことの性質が大きく異なるだろう。このような違いに着目し、さらなる分析を加えることで、英語学習者のフィラー使用実態についての理解がより一層深まることが期待される。

なお、そもそも英語発話におけるフィラーと日本語発話におけるフィラーは、性質が大きく異なる可能性がある。Iwasaki (1993)によれば、日本語の自然発話は英語の自然発話に比べて、統語的なユニットが複数の音声的チャンク(イントネーションユニット)に分割されて漸次的に産出される傾向が強い。また、Clancy et al. (1996)は、日本語会話は英語会話に比べて、一つの文中に多数の聞き手反応発話(例:相槌)が差し挟まれる頻度が著しく高いことを報告している。母語話者の自然談話データに基づくこれらの日英対照研究は、日本語母語話者にとっての発話構築がそもそも断片的かつ漸次的なものであることを示唆している。日本人英語学習者のフィラーについて検討する際にも、日本語と英語の間でのフィラーの性質の違いを考慮する必要がある。

最後に、本研究の持つ英語教育実践への含意を述べよう。まず、学習者の目標言語(本研究の場合は英語)におけるフィラーの習得が容易ではないことを裏付ける結果と捉えることができる。単に繰り返しスピーキングを行わせるだけでなく、フィラーを始めとする「平常的非流暢性」を含んだ自然発話のインプットが必要だろう。その際、本研究で得られた知見をメタ知識として学生たちに導入することで、より効率的にインプットを行うことができる可能性があるだろう。

文 献

- [1] D. Biber, S. Johansson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan, *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London, Longman, 1999.
- [2] G. Brown, *Listening to spoken English*. Essex,

- Longman, 1977.
- [3] P. M. Clancy, R. Suzuki, H. Tao, & S. A. Thompson. "The Conversational Use of Reactive Tokens in English, Japanese, and Mandarin," *Journal of Pragmatics* vol.26, no.1, pp. 355-387, 1996.
- [4] H. Clark & J. Fox Tree, "Using *uh* and *um* in Spontaneous Speaking," *Cognition*, Vol. 84, pp. 73-111, 2002.
- [5] P. Foster, "Fluency," *Encyclopaedia of Applied Linguistics*. Wiley-Blackwell, 2012.
- [6] B. Fox, "Introduction" In N. Amiridze, B. H. Davis & M. Maclagan (eds.), *Fillers, Pauses and Placeholders*, Amsterdam/New York, John Benjamins, pp. 1-9, 2010.
- [7] R. Griffiths, "Pausological research in an L2 context: a rationale, and review of selected studies," *Applied Linguistics*, Vol. 12, No. 4, pp. 345-364, 1991.
- [8] Y. Harada, K. Maebo, M. Kawamura, M. Suzuki, Y. Suzuki, N. Kusumoto, & J. Maeno, "Toward Construction of a Corpus of English Learners' Utterances Annotated with Speaker Proficiency Profiles: Data Collection and Sample Annotation," In T. Tokunaga and A. Ortega (Eds.), *LKP 2008, Lecture Notes in Artificial Intelligence (LNAI) 4938*, pp. 171-178. Berlin Heidelberg, Springer-Verlag, 2008.
- [9] S. Iwasaki, "The structure of intonation unit in Japanese" In S. Choi (ed.) *Japanese/Korean Linguistics vol.3*. Stanford: CSLI 39-53, 1993.
- [10] O. Kang, "Relative salience of suprasegmental features on judgments of L2 comprehensibility and accentedness," *System*, Vol. 38, No. 2, pp. 301-315, 2010.
- [11] R. Koizumi, *Relationships between productive vocabulary knowledge and speaking performance of Japanese learners of English at the novice level*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Tsukuba, 2005.
- [12] J. Kormos, "Monitoring and self-repair in L2," *Language Learning*, Vol. 49, No. 2, pp. 303-342, 1999.
- [13] P. Lennon, "Investigating fluency in EFL: A quantitative approach." *Language Learning*, Vol. 3, pp. 387-417, 1990.
- [14] W. M. Levelt, *Speaking: From Intention to Articulation*. Cambridge, MIT Press, 1989.
- [15] H. Maclay & C. E. Osgood, "Hesitation phenomena in spontaneous English speech," *Word*, Vol. 15, pp. 19-44, 1959.
- [16] 中島悦子, 「自然談話に現れるフィラー-自然談話録音資料に基づいて-」, 『国士舘大学アジア・日本研究センター紀要』, Vol. 04, pp. 1-23, 2009.
- [17] Pearson, *Versant English Test – Test Description and Validation Summary*, Palo Alto, 2007.
- [18] C. L. Rieger, "Disfluencies and hesitation strategies in oral L2 tests," In R. Eklund (ed.), *Proceedings of Disfluency in Spontaneous Speech Workshop (Gothenburg Papers in Theoretical Linguistics 90)*, pp. 41-44, 2003.
- [19] R. Rose, "Filled Pauses in Language Teaching: Why and How," In *Bulletin of Gunma Prefectural Women's University*, Vol. 29, pp. 47-64, 2008.
- [20] 定延利之・田窪行則, 「談話における心的操作モニター機構: 心的操作標識「ええと」と「あの(一)」」, 『言語研究』, Vol. 108, pp. 74-93, 1995.
- [21] E. A. Schegloff, "Ten operations in self-initiated, same-turn repair," In (eds.) M. Hayashi, G. Raymond & J. Sidnell, *Conversational Repair and Human Understanding*, Cambridge University Press, pp. 41-70, 2013.
- [22] E. A. Schegloff, H. Sacks & G. Jefferson, "The preference for self-correction in the organization of repair in conversation," *Language*, Vol. 53, No. 2, pp. 361-382, 1977.
- [23] L. Temple, "Disfluencies in learner speech," *Australian Review of Applied Linguistics*, Vol. 15, pp. 29-44, 1992.
- [24] 山根智恵, 『日本語談話におけるフィラー』, 東京: くろしお出版, 2003.
- [25] M. Watanabe, *Features and Roles of Filled Pauses in Speech Communication: A corpus-based study of spontaneous speech*, 東京: ひつじ書房, 2009.
- [26] M. Watanabe & R. Ralph, "Pausology and Hesitation Phenomena in Second Language Acquisition." In *The Routledge Encyclopedia of Second Language Acquisition*, New York/London: Routledge, pp. 480-483, 2012.